

母子避難8年・闘いの記録

写真は朝日新聞2月21日夕刊。24日深夜に放映されたドキュメンタリーの番組案内。

東日本大震災から3月で8年が経つ。MBSが東京電力福島第一原発事故の影響で自主避難を余儀なくされた家族の歩みを描くドキュメンタリー「フクシマの母～母子避難8年・闘いの記録」を制作した。

番組では、大阪市在住の森松明希子さん(45)の日々に密着。震災後、放射能汚染の影響を考え、福島県郡山市から幼い子ども2人と避難した。避難者が国と東電に損害賠償を求めている大阪地裁の訴訟の原告団代表の顔も持つ。各地で講演し、原発事故の問題について発信を続けている。夫は仕事の関係で福島に住み続けており、再開できるのは月に1回くらい。家族が離れて暮らす間に、子どもたちはぐんぐん成長していく。

津村健夫ディレクターは、2014年と16年の番組でも森松さん一家を紹介した。約8年という年月について、「震災や原発事故が取り上げられる機会が減り、より風化が進んでいる」と危機感を募らせている。

番組を録画して見た。福島第一原発事故のあと、幼い2人の子どもと大阪に母子避難した森松明希子さん。それから8年が経つ。子どもたちの郡山で仕事を続ける父親と、つかの間の再会後の辛い別れ。思わず目頭があつくなかった。でも子どもたちが成長していく様子が、画面からも感じとれる。原発賠償関西訴訟の原告団長として、全国各地で講演する森松さんの姿とともに、子どもたちの成長に元気をもらうことができた。

番組を見たあと、『3・11 避難者の声～当事者自身がアーカイブ』に掲載されている避難から3年後の森松さん声を思い起こした。

私は普通に子育てをしていた福島のいち主婦、ひとりのただの母親でした。まさか、国や東京電力相手に、「避難の権利」が憲法上の権利であると思う、だとか、命や健康に関わる権利が侵害され続けているので守ってください、という訴えを裁判所に訴え出なければならないとは思ってもみませんでした。でも一人ひとりができることは何か、福島県で原子力災害を間近で体験し、放射線被曝に直面した私ができることは事実を皆さんにお話し、事実を共有し、理解と共感を得ることしかないと思いました。これまでの避難生活が多くの方々に支えられ、避難をすること、それと同時に被ばくから直接的に身を守ることができています。非常に感謝すべきことです。これからも、今の私にできることは、おかしいことはおかしいと、何が最も大切にされなければならないのか、一母親、一国民の立場として訴えでることしか、社会へ返すことができません。……

(2019年3月23日)

